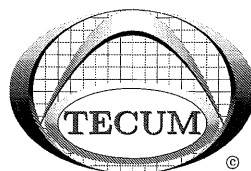


## 第2刷に寄せて

2017年9月に、『数学の二つの心』という聞きなれないタイトルの、見方によってはいささか挑発的な本を出して、幸いちょうど1年で重版がかかるという光栄に浴した。この本に込められた筆者の祈りに似た気持ちに共感してくださる読者がそれなりにいらっしゃることは、筆者にとって大きな希望であり、「高齢や老体を口実に現状の追認勢力になるな」という激励として感謝している。

ここで、少々付言したいことは、筆者が本書の中で、「表の心はすべて虚偽、真実は裏の心にこそある」と主張しているかに映るであろうが、それは「表」ばかりが目立つ世情に逆らって、「裏」のもつ力(威力と魅力)を強調したためであり、教育の現場において一様一律に「裏」こそが正しいと主張したいのではないことである。単純化していえば、「現代数学的な厳密さこそが理想であって、学校数学は虚偽に満ちている」というような非寛容な原理主義的「現代数学一神教」の主張とは正反対に、数学、とりわけ学校数学には、いわば楕円の焦点のように《二つの心》があり、少なくとも教える側は、それらの間の緊張感を忘れないようにしたい、ということである。

本書を上梓したときに次世代のためにと思って始めた「プロジェクト TECUM」(<http://www.tecum.world/>)は、1年近く経って法人化の目処が立ち、ようやく離陸しつつあるが、ここにそのロゴを紹介させていただきたい。



数学教育に携わる人間の《知的なネットワーク》が《二つの心の周り》に《手と手を取り合って結合する》ことで生まれる《数学教育の新しい力の場》を創出することを願ってデザインしたものである。